

# 愛する御子の支配下に

コロサイ 1 : 1 - 14



司祭 ヨハネ 井田 泉

2019年7月14日  
聖霊降臨後第5主日

奈良基督教会にて

先週、わたしは機会を与えられて、群馬県高崎市にある榛名荘病院に入院中のある方をお見舞いしました。その際、病院に隣接している榛名聖公会という教会を案内していただきました。その地域は、新生会という聖公会の社会福祉法人がたくさんの老人ホームなどを運営していて、それだけで一つの村ができていて、と聞きました。榛名聖公会の主日礼拝の参加者はほとんどがご高齢の方方で、平均年齢は 80 歳くらい。それが毎週 40 人も集まられる、と聞いて非常に驚きました。会衆席の一角には、耳の遠い方のための席が 10 ほど設けられていて、イヤホンで耳に当てると良い音質で祈りや説教を聞くことができるようになっていました。教会のあり方として教えられました。

それとともに深く感じたのは、その礼拝堂——この奈良基督教会と比べればはるかに小さく簡素な木造の礼拝堂で、名前は「聖守護天使礼拝堂」。およそ 70 年の歴史だそうです——が祈りの空気に満ちている、ということでした。そこではたんさんの方々が喜びと悲しみと感謝を抱えて祈ってきた。礼拝に集えることを最大の喜びとしてこられた方々の祈り。ひとり泣くためにも開放されている空間。そこから多くの人が地上の生涯を終えて旅立たれた場所。ほんとうに祈りの空気が礼拝堂には満ちているのです。不思議な平安を与えられる空間でした。

わたしたちの教会はどうでしょうか。わたしはここに来て以来、この礼拝堂をもう数百回もたくさんの人びとに紹介してきましたと思います。この椅子、柱、床、壁、天井、すべてに、たくさんの人びとの祈りがしみこんだ祈りの空間であると話してきました。いろいろ説明をするよりも、この祈りの空間の空気と光を感じていただくのが何より大切だと言ってきました。

奈良基督教会は何度もテレビや新聞で紹介され、また国の重要文化財に指定されて有名になりました。各地から多くの人々が訪れるようになった。先日も韓国のメソジスト教会の方々 が来られて、ここで礼拝をささげ、耐震工事のために献金をしてくださった。感謝です。

けれどもここに大きな危険もあります。教会が観光地化する危険です。つまり、祈りの空間であることが失われる危険です。礼拝堂は過去の文化遺産ではありません。現役の生きた祈りの場所です。過去から現在にまで継承されてきた祈りと信仰。それを今深めて、これを後の人びとに引き継いでいくのがわたしたちの使命です。今、いよいよ準備が本格化してきた耐震補強工事は、この礼拝堂が祈りの家としてより深い、確かなものを宿していくためのものでなくてはなりません。

さて今日、最初に読まれたのはパウロによるコロサイの信徒への手紙第1章の冒頭でした。ここを読んでまず感じることは、

この手紙が祈りつつ書かれている、ということです。

「1:1 神の御心によってキリスト・イエスの使徒とされたパウロと兄弟テモテから、2 コロサイにいる聖なる者たち、キリストに結ばれている忠実な兄弟たちへ。わたしたちの父である神からの恵みと平和が、あなたがたにあるように。」

「わたしたちの父である神からの恵みと平和が、あなたがたにあるように。」

これは定式的な挨拶の言葉かもしれませんが。けれどもパウロは獄中であって、これらの言葉に深い思いをこめて、コロサイの教会の人びとのために祈りつつこれを書いているのです。

それを読む側も深い思いをもって読むならば、「わたしたちの父である神からの恵みと平和」を実際に受ける、それを経験することになるのです。

3 節から本文が始まります。

「3 わたしたちは、いつもあなたがたのために祈り、わたしたちの主イエス・キリストの父である神に感謝しています。」

パウロ、そして共同の差し出し人テモテは、ともにコロサイの人びとのために祈っています。そして神に感謝しています。

同じことが9 節で繰り返されます。

「9 こういうわけで、そのことを聞いたときから、わたしたちは、絶えずあなたがたのために祈り、願っています。」

このように二度も、あなたがたのために祈っていると書いています。

ふと思い出すことがあります。もう 40 年か 50 年か昔、わたしがとても精神的に不安を抱えていた時期に、聖書をすぎるように読んでいました。ある日、この箇所だったかどうかは忘れましたが、こういう箇所を読んで、「ああ、パウロがわたしのために祈ってくれている」。それを感じただけでどれほどありがたかったかわかりません。もちろんパウロは遠い昔のコロサイの人びとのために祈っているのですが、それを超えてわたしのためにも祈ってくれていると感じることは幸せです。

しかし実は、パウロを支えているのはイエス・キリストです。パウロ以上に、イエス・キリストが今も、確かに、わたしたちのために祈ってくださる。主イエスが祈ってわたしたちを支えてくださる。それを思いたい。心に刻みたい。感じてみたいと願います。

今日の箇所の中から、もうひとつの言葉に目をとめてみましょう。

**「13 御父は、わたしたちを闇の力から救い出して、その愛する御子の支配下に移してくださいました。」**

不思議な言葉に聞こえるかもしれません。しかしこれが聖書の福音です。それがキリスト教の中核です。イエス・キリスト

の十字架と復活によってわたしたちに与えられたことはこのことなのです。

神が、「わたしたちを闇の力から救い出して、その愛する御子の支配下に移してください」った。わたしたちはすでに神の御子イエスの御手のうちに守られています。イエスの愛と力が満ちている場所の中に移し入れられているなら、安心と平和が与えられます。そして、御子の支配、言い換えれば、イエスさまの祈りと願いの中に包まれ生かされて、イエスの願いをわたしたちも一緒に願い、イエスの働きをともにしていく者とされている。——これが「御子の支配下に移」されたわたしたちです。

#### 「御子の支配下に移された」

わたしたちは御子イエスのもとに引き寄せられて守られている。イエスの力強い両手が、わたしたちをしっかりと守ってくださる。イエスの間近に引き寄せられたので、イエスの声が聞こえる。イエスのまなざしがわたしたちを温かく見つめてくださるので、安心していられる。と同時に、その目はわたしたちに期待する目です。わたしたちのために祈りつつ、何かを願っておられる目です。

イエスの願い。その第1は、教会を祈りの場所、信仰の育まれる空間に必ずしたい、という願いです。うわさ話や世間的な悪口が幅を利かせる場所ではありません。

その第2は、この世の価値観や世間を恐れるな。あなたがたはわたしの支配下に、あなたを守るわたしの手の中に入ったのだから、よけいなものに縛られず自由でいなさい。自由でいてほしいという願いです。

そして第3は、さあ、ここから出かけて行って、この世界に愛と正義と平和を広げよう、という願いです。

祈ります。

神さま、わたしたちに教えてください。わたしたちがすでに主イエスの支配の下に置かれ、そのみ手の中に包まれていることを。そしてイエスの願いがわたしたちの願いとなるように、この地上にみ心が実現するためにわたしたちが生きて祈り働くものとなるように、主が願っておられることを教えてください。  
アーメン